ダニエル書7章1－8節 「荒れ狂う世界」

1A 夜に見た幻 1－3

1B 寝床で見た夢 1

2B 大海をかき立てる四方の風 2－3

2A 四つの王国 4－8

1B バビロン帝国 4

2B メディア・ペルシア帝国 5

3B ギリシア帝国 6

4B 新ローマ帝国 7－8

1C 十本の角 7

2C 小さな角 8

本文

ダニエル書 7 章を見ていきます。週報には、7 章 1 節から 18 節までと書きましたが、あまりにも内容が詰まっていますので、今晩は 1 節から 8 節までにしたいと思います。

私たちはこれまで、ダニエルの生涯を辿っていました。少年の頃に捕え移されて、バビロンの王に仕える者となりました。そして、バビロンがメディア・ペルシア連合軍によって倒れて、その後のメディア・ペルシアの国の中でも、キュロス王の統治の始めの時まで彼は仕えていました。王のごちそうの肉やぶどう酒を、主にあって食べないことを心に定めたところから、最後、獅子の穴に投げ込まれも、無傷で救い出されたところまで、彼の主に対する忠実な姿を私たちは見て、世に生きる信仰者の手本を見ることができました。

そして、ダニエルは 7 章から、自分自身が見た夢と幻を書き記したものを書いていきます。これから、とてつもない、おぞましい内容になります。主を愛しやまないダニエル、人々からは非の打ちどころのない公務を果たしていたダニエルですが、主の示された啓示を受け取って、混乱し、動揺し、顔色が変わるほどになりました（7:28）。これから示されることは、聖書の舞台、つまりイスラエルを取り囲む世界を中心に起こった国々の戦や征服の預言です。イスラエルの周りだけでなく、世界全体にも及ぶ大きな戦であります。7 章から 11 章まで続き、12 章にてようやく、メシア、キリストが来られて、その患難から、ご自分の民イスラエルが救われるところで終わります。

昨晩、クリスチャンではないある方と、お話しする機会がありました。神を求めておられる方です。「いつか世界の人々が、もういい加減、平和にやっていこうよ、という時は訪れるのですかね？」と言われました。私はこう答えました。「キリスト者は、理想主義者であるとともに現実主義者とも呼

ばれます。現実には、そのような時は訪れません。キリストが来られないと世界に平和は来ません。」彼のような思いは、すべての人が持っていることでしょう。世界に平和が来てほしいです。けれども、アダムが神に対して罪を犯した時から、争いが人に入りました。アダムの息子カインとアベルの間から早速、起こりました。カインがアベルを殺したのです。ダニエルは、このような現実を、神に愛されたしもべであるがゆえに、我々、後世の者たちが読んで、調べて、神を求めるようにするために、彼にお見せになったのです。

1A 夜に見た幻 1－3

1B 寝床で見た夢 1

1 バビロンの王ベルシャツァルの元年に、ダニエルは寝床で、ある夢と、頭に浮かぶ幻を見た。それからその夢を書き記し、事の次第を述べた。

時は紀元前 553 年です。「バビロンの王ベルシャツァル」の治世の始まりの時に、ダニエルが夢と幻を見ました。ダニエルは 70 歳弱の年齢でした。私たちは 5 章において、彼が最後にペルシア・メディア連合軍によって滅びるところを読みました。つまり、バビロンがこれから終わるであろうという予感がする時に、バビロンから始まる世界を前もって神が彼にお見せになりました。

寝床において、夢を見ました。その夢の中で、いくつかの幻がありました。（日本語には現れていませんが、幻は複数形になっています。）2 節から 7 節までの幻があり、8 節から「私が見ていると」とあるように、別の幻に移っています。この幻が終わって次に 16 節以降で、自分の傍らに立っていた人に、見たことの意味を告げてくださるように頼んでいます。

そしてその夢が終わった後に、そのあらましを書き記しました。彼は、この時に相当、動揺しています。15 節には、「私ダニエルの心は私のうちで悩み、頭に浮かんだ幻は私をおびえさせた。」とあります。そして 7 章の最後に、こうあります。「28 ここでこの話は終わる。私ダニエルは、いろいろと思い巡らして動揺し、顔色が変わった。しかし、私はこのことを心にとどめた。」顔色が変わるほどの動揺だったのですが、しかし彼は、しっかりと心に留めて書き記しました。

神は、ご自分の愛する者たちに予め、本人たちがその時には全く理解できないこともお見せになることがあります。ヨセフが夢を見た時に、太陽と月と星が自分を拝んでいると家族の人たちに話しました。太陽は父ヤコブを表し、月は母のことを、そして星々は兄たちのことを示します。ヤコブはヨセフを叱りました、「創 37:10 いったい何なのだ、おまえの見た夢は。私や、おまえの母さん、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拝むというのか。」けれども、彼は、「37:11 このことを心にとどめていた。」とあります。とんでもないことであるのですが、それでも、心に留めたのです。逡巡すると言いますか、私たちが本当に理解をはるかに超えることが起こる時に、心を悩ませ、思いがどんどん巡っていくことがあるでしょう。それでも、神が何かをしておられる

に違いないとして、心に留めるのです。

同じことをイエスの母、マリアは行いました。イエス様が 12 歳になられた時に、両親がエルサレムに都のぼりをしましたが、帰りにイエス様は神殿に残られていました。両親はイエスがいなかったのを知ってエルサレムに戻り、神殿の中にいる彼を見て驚き、母が叱りました。しかし、こう答えられました。「ルカ 2:49 どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」人間的には、訳の分からないことを言われています。けれども、「2:51 母はこれらのことをみな、心に留めておられた。」とあります。マリアは、生まれて間もないイエス様をエルサレムに連れて行った時も、シメオンから動揺するようなことを言われていました。「2:34-35a ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。35a あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。」このように、主は前もって、ご自分の愛する人に対して、心が刺し貫かれるようなことを語られます。それは、愛する者に前もって知らせたいと願われているし、このような事を示されても、それでも心に留めることができるとみなしておられるからです。

2B 大海をかき立てる四方の風 2－3

2 ダニエルは言った。「私が夜、幻を見ていると、なんと、天の四方の風が大海をかき立てていた。

「大海」の中から出てくる、四頭の獣の夢を見ます。大海が、風によってかき立てられていますが、その荒々しい、人が制御できない世界を映し出しています。旧約聖書の中には、「大海」は地中海を指しています（民数 34:6-7 など）。地中海の周辺での出来事ですが、けれども、「天の四方の風」とあるように、その大海で起こっていることが全世界を巻き込んでいる姿として映し出しています。

今、私は、いくつかの場所で、世界情勢と聖書を語る勉強会を持たせていただいています。地中海の周辺、つまりイスラエルやその周辺諸国、中東地域で起こっていることが世界にいかに影響を与えているかを話しています。それは聖書の見方であるのです。ユダヤ人は、しばしば世界の日時計と呼ばれますが、イスラエルに何が起こっているかを見る時に、世界全体がどうなっているのかを見ることができるのは、ダニエル書の預言からはっきりと分かるのです。

そして、その荒れ狂う海についてですが、黙示録 17 章 15 節において、大きな都バビロンが座っている大水について、「あなたが見た水、淫婦が座しているところは、もろもろの民族、群衆、国民、言語です。」とあります。そしてイザヤ書に、「57:20 しかし、悪しき者は荒れ狂う海のようだ。まことに、それは鎮まることができず、その水は海草と泥を吐き出す。」とあります。人の悪によって世界の国々が荒れ狂っており、そしてその悪いものをどんどん吐き出していくような状態です。私たち人間が生きている世界がこのようなものなのです。

2003 年の New York Times と呼ばれる新聞記事には、世界の記録されている歴史の中で、全体が平和だった年数を数えているものがあります。なんと、たった 268 年の平和しかなかったそうです。しかも、連続して世界に平和があったのは、76 年間だそうです。第二次世界大戦から現代に至るまでの平和秩序です。[1]もちろん、第二次世界大戦以後も、数多くの荒れ狂うような戦争がありました。けれども、歴史全体で考えると、そのような争いは争いにも数えられないほどのものであり、平和であったということなのです。

私たちは、平和ボケと言いますか、今の状況が当たり前だと思いがちです。けれども、かろうじて平和が保たれていると言ってよく、上に立つ人たちのために知恵が与えられるよう祈らなければいけないことがよく分ります。「Ｉテモ 2:1-2 そこで、私は何よりもまず勧めます。すべての人のために、王たちと高い地位にあるすべての人のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい。2 それは、私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。」

私たちは、いろいろな、戦争や疫病の噂を聞いて心を動揺させてしまいますが、過去に起こったことは、もっともっと酷かったということを思い出すべきですね。C.S.ルイスは、核戦争の危機によってイギリスの人々が神経をすり減らしている中で、彼はこう答えました。「16 世紀に戻れば、私たちはロンドンに疫病が毎年、流行していた時にどう生きていたか。ヴァイキング時代には、いつ何時、スカンディナヴィアから海賊が陸に上陸して、人々を夜襲し、喉元を斬るか分からない時に、どう生きていたのか？」と言っています。[2]私たちで言うならば、戦国時代のことでしょう。いつ何時、殺されたり、家を襲われたり、戦に巻き込まれて逃げなければいけないか分からない状況でしょう。

、今よりももっともっと大変だった過去があり、そして将来は、イエス様がオリーブ山で言われたように、かつてないほどの、とてつもない患難がこの世界を襲うと言われたことです。黙示録を見れば、その患難の様子が克明に描かれています。パウロも、主の日には今の平和が突如としてなくなることを警告しました。「Ｉテサ 5:3 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。」私たちの生きている、比較的平和な期間は束の間の休憩ぐらいなものなのです。

3 すると、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた。

大きな獣が四頭出てきました。それぞれが、2 章でネブカドネツァルの見た、人の像の夢に匹敵します。バビロンは人の像では金の頭でありますが、ここでは獅子のような獣です。メディア・ペルシアは銀の胸と両腕でしたが、ここでは肉を食らう熊のような獣です。そしてギリシアは青銅の下腹と太ももでしたが、ここでは四つの翼と四つの頭を持つ豹です。そして、ローマは鉄のすねと足

---

1 https://www.nytimes.com/2003/07/06/books/chapters/what-every-person-should-know-about-war.html
2 https://lifewayresearch.com/2020/03/19/no-c-s-lewis-would-not-tell-you-to-ignore-the-coronavirus/

でしたが、ここでは得体の知れない、鉄のきばを持つ獣として登場します。ネブカドネツァルの見た夢は、この世の王や人間が見ている、国々の栄華を象徴しているでしょう。しかし、神の人ダニエルの見る同じ国々は、人間の荒々しい罪の姿をよく表しています。そして、神の主権や力に対するそれらの国々の横暴さを見るのです。

獣というのが、どれほど人間が抗うことのできないものかを教えられます。ヨブ記には、主なる神が嵐の中でヨブに現れ、それぞれの野の獣が、いかに人間が制している家畜とは違い、どうすることもできない存在かを教えておられます。最後には、巨大な草食恐竜のような獣が出てきます。そして最後には、まさに竜ではないかと思われる、火を噴く恐竜の姿が出てきます。私たち日本人、いや世界中の人たちが、長年、ゴジラの映画を慕ってきましたね。自衛隊による攻撃をしても、ゴジラには、歯が立たない姿を見ごとに描いていますが、人間の歴史に現れる世界的な帝国は、だれもが予想できないようにして台頭し、だれもが制御することができず、まさにモンスター、怪獣のような姿をしています。

2A 四つの王国 4－8

1B バビロン帝国 4

4 第一のものは獅子のようで、鷲の翼をつけていた。見ていると、その翼は抜き取られ、地から身を起こされて人間のように二本の足で立ち、人間の心が与えられた。

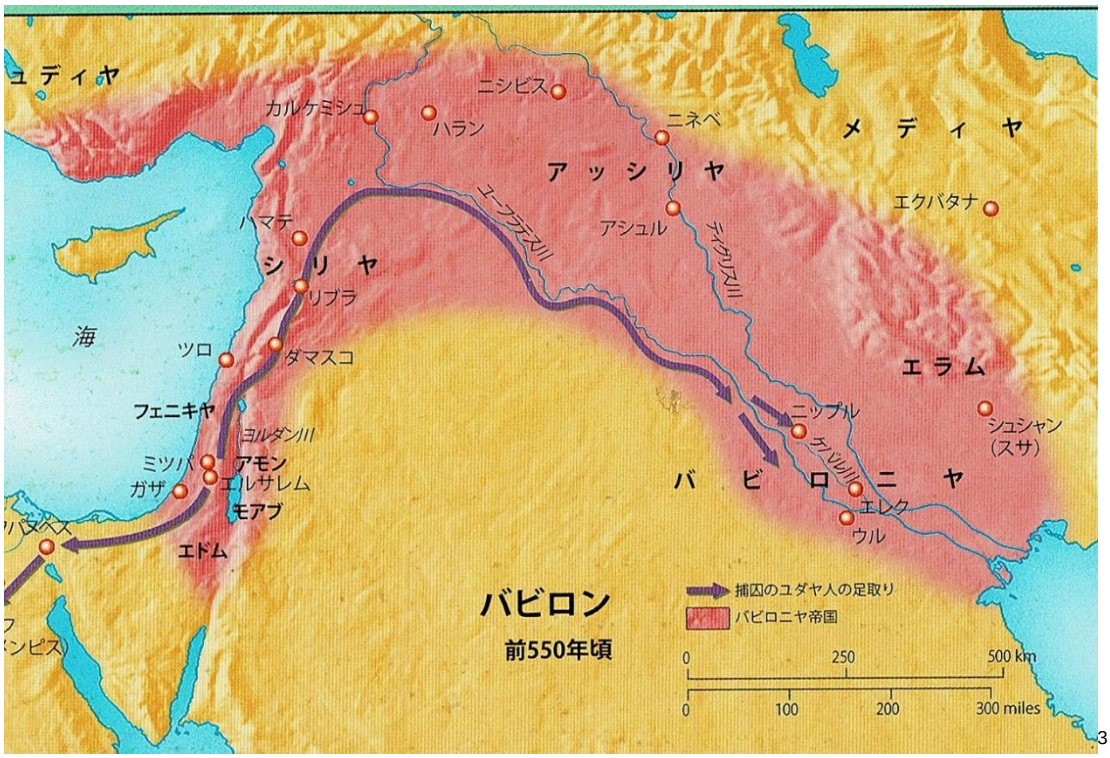
バビロンですが、ネブカドネツァルが王となった紀元前 605 年から、ベルシャツァルが殺される 539 年までの間です。「獅子のようで」とありますから、実際の獅子ではありませんでした。この獣は鷲の翼を持っています。

獅子は、王を表す動物として聖書の中でも、歴史の中でも現れます。例えば、ソロモンの王座のわきには雄獅子の彫刻が立っていました。王座の階段にも、「Ⅰ列王 10:20 十二頭の雄獅子が六つの段の両側に立っていた。」とあります。獅子は動物界の王であります。私たちの主ご自身が、黙示録 5 章では「ユダの獅子」と呼ば

れています。ユダ族から王が出てくると、ヤコブも預言していたからです（創世 49:9-10）。同じように鷲は鳥類の王であります。エゼキエル書 17 章には、バビロンとエジプトを大鷲に例えています（3,7 節）。

バビロン王宮の入り口には、獅子の門がありました。ダニエルは、浮彫の彫刻であるこの獅子を毎日というほど見ていたことでしょう。またイランで発掘されたバビロンの浮彫彫刻には、翼のついた獅子があります。

バビロン帝国がどれほどのものであったのか、その勢力地図を見るだけでも驚きます。メソポタミア地方一体と、イスラエルを越えてエジプト方面にまで及びました。



[3]

その獅子の翼が抜き取られ、地から起こされ、人間のように二本足で立たされ、人間の心が与えられたのですが、これは４章に出てきたネブカドネツァルの姿です。彼が人間の中から追い出され、野の獣とともに住み、牛のように草を食べ、七つの時が過ぎてから、理性が戻ってきました。

2B メディア・ペルシア帝国 5

5 すると見よ、熊に似た別の第二の獣が現れた。その獣は横向きに寝ていて、その口の牙の間には三本の肋骨があった。すると、それに『起き上がって、多くの肉を食らえ』との声がかかった。

[3] 聖書地図 (いのちのことば社) (エッセンシャル・バイブル・レファレンス)

メディア・ペルシア帝国ですが、539 年から 331 年までの間です。この国を表す熊ですが、聖書では、獅子に次ぐ第二の動物として出てきます。ダビデがサウルにゴリヤテと戦う時に、自分にそれができることを説明するときこう言いました。「Ⅰサム 17:34-36a しもべは、父のために羊の群れを飼ってきました。獅子や熊が来て、群れの羊を取って行くと、35 しもべはその後を追って出て、それを打ち殺し、その口から羊を救い出します。それがしもべに襲いかかるようなときは、そのひげをつかみ、それを打って殺してしまいます。36a しもべは、獅子でも熊でも打ち殺しました。」そしてアモス書 5 章 19 節には、「人が獅子の前を逃げても、熊が彼に会い・・・」とあります。ダニエルが、人の像の、銀の胸と両腕を「あなたの後に、あなたより劣るもう一つの国が起こり（2:39）」と解き明かしましたが、この獣の幻の中でも第二の動物として表れているのです。

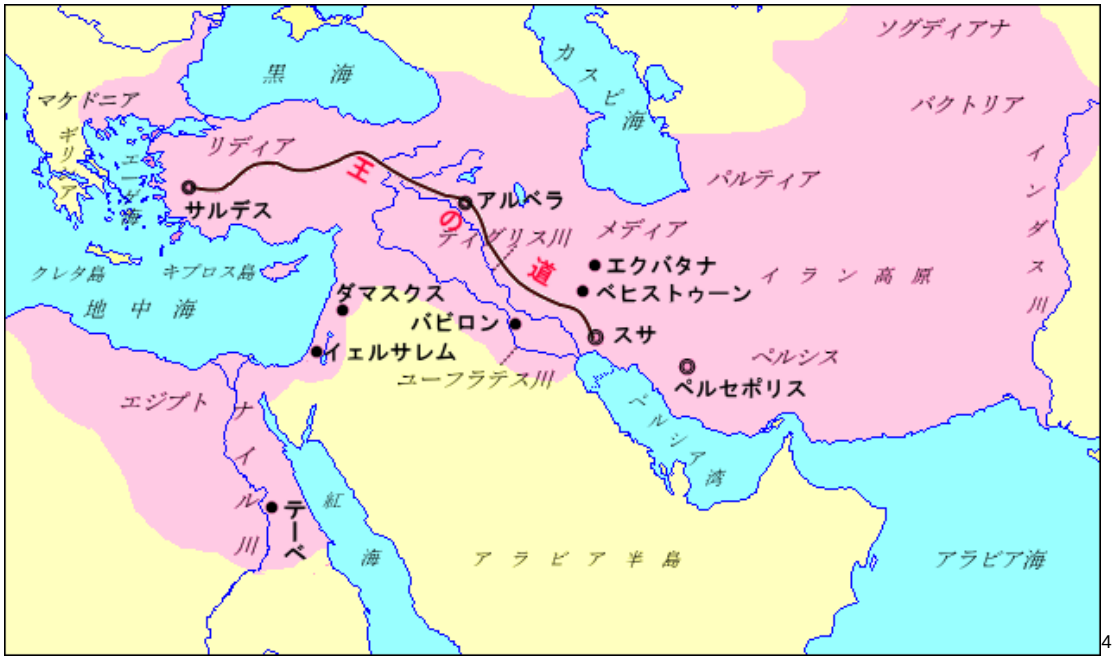
そして「横向きに」寝ているという状態が興味深いです。これは、メディアとペルシアの二つの国を表しているのではないかと考えられます。メディア･ペルシア帝国というと連合国のように聞こえますが、事実上、ペルシアがメディアを征服し、それを併合しました。ペルシアがメディアを凌駕しているということで、ペルシア側がメディア側よりも高くするために、横ざまになっているのではないかと思います。8 章にあるメディア・ペルシアを表す雄羊にも、一方の角がもう一方より長くなっています。

そして「その口の牙の間には三本の肋骨があった」とありますが、熊のようにとてつもない大きな獣のようになった巨大帝国は、メディア国とペルシア国、そしてバビロン国の人々がその中で犠牲になっていることを表しているのでしょう。を表していると考えられます。ペルシアがメディアを喰らい、そしてメディアとペルシアがバビロンを喰らいました。

そしてさらに、「起き上がって、多くの肉を食らえ」との声がかかりましたが、元のペルシア、メディア、そしてバビロンだけでは物足りませんでした。小アジア（今のトルコ）の西部にあったルデヤ、エジプトを征服しました。エステル記に登場するクセルクセス王の時に最盛期を迎えますが、彼は西方遠征に行き、今のトルコからさらに西方、ギリシアの国々に攻め入ります。（「ペルシア戦争」紀元前 492-449 年）三百人のスパルタの精鋭部隊が、ペルシア軍に戦ったテルモピュライの戦いは、映画「300」にもなったので有名ですが、その時のペルシア軍は 210 百万人であると、歴史家ヘロドトスは書きます。210 百万人です！熊がおぞましい力で獲物を食いちぎるその姿であったことでしょう。

「肉を食らう」という残忍さは、メディア人がバビロン人を殺す姿としてイザヤ書に出ています。「13:17-18 見よ、わたしは彼らに対してメディア人を奮い立たせる。彼らは銀をものともせず、金さえ喜ばず、18 その弓は若者たちを撃ち倒す。彼らは胎の実さえあわれまず、子どもたちにさえあわれみをかけない。」まさに「肉を食らう」姿です。

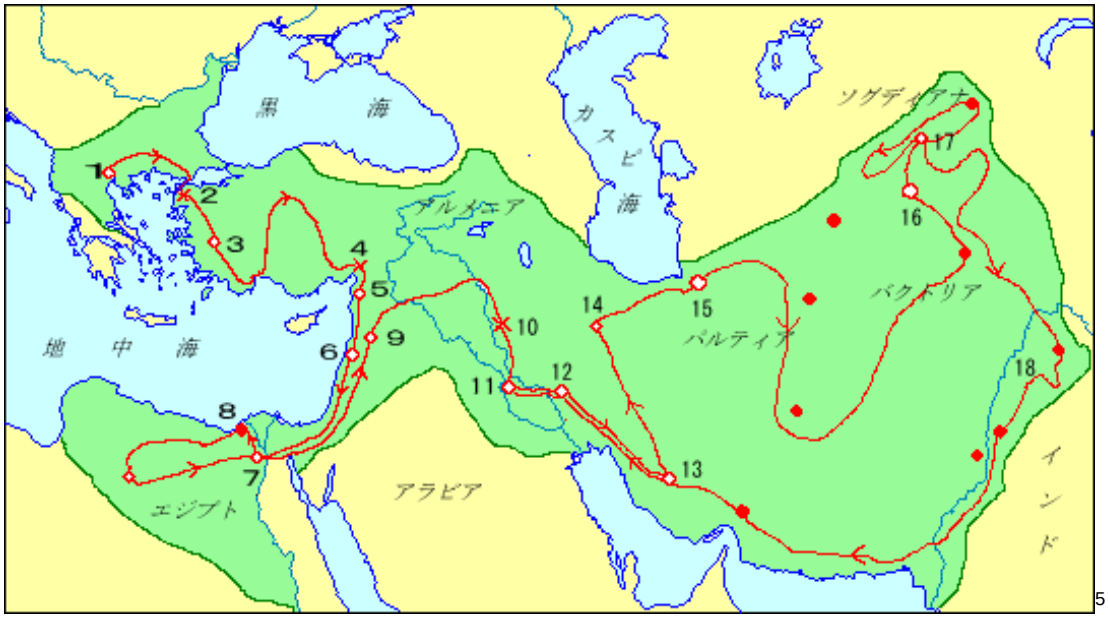
そしてこれを、地図で勢力範囲を見れば、バビロンよりもさらに広範囲に襲っていった、まるで猛獣である獅子バビロンを食べて、進化して膨張したかのような熊の姿に見えます。



[4]

3B　ギリシア帝国　6

[6] その後、見ていると、なんと、豹のような別の獣が現れた。その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があった。そしてそれに主権が与えられた。



[5]

[4] https://www.y-history.net/appendix/wh0101-103.html
[5] https://www.y-history.net/appendix/wh0102-095.html

ギリシア帝国です。紀元前 331 年から 168 年（第三次マケドニア戦争）までの間です。豹は、獲物を追うときの敏捷さが特徴です。ダニエルが、「見ていると、なんと」と言いましたが、あまりにも急に出てきたので驚いているのです。さらに、その走る速度を加速させるかのように、背に鳥の翼があります。これはギリシアの特徴をよく表しています。

8 章と 11 章に、ギリシアを帝国にまで拡大させたアレキサンダー大王と、その後の四分割されたギリシアの預言が出て来ます。彼は数年のうちに、当時知られた文明化された地をすべて征服しました。西は今のギリシアであるマケドニアから南はエジプトまで及びました。そして、東はペルシアからさらにインドにまで及びました。インドでは、象の部隊に対して戦ったと言われています。これを、334 年の遠征開始から 326 年のインダス越えまでの、たった 8 年間で成し遂げます。

けれども豹の頭は四つあります。翼も四つあります。これもギリシア史にあるとおりです。アレキサンダーは若くして、紀元前 323 年に夭折しました。後継者もなく死んでしまったので、その後、総督たちによる後継者の戦いがあり、結局、帝国は四人の総督に分割されました。シリア、小アジア、マケドニア、そしてエジプトです。このうちシリアのセレウコス朝とエジプトのプトレマイオス朝が優勢になり、シリア・エジプト戦争を何度となく行ないました。これらの預言は８章と11 章にあります。

このギリシアの影響は文化と言語において、新約時代にまで多大な影響を与えています。新約聖書は、ギリシア語で書かれました。ローマ時代に入っていたのに、一般庶民はギリシア語を使用していたのです。ですから、イエス様が十字架に付けられた時に罪状書きは、ユダヤ人の言語であるヘブル語、ローマの公用語であるラテン語、そしてギリシア語の三言語で書かれていました。そして使徒の働きを見れば、ギリシア文化の影響を強く受けた、ギリシア語を話すユダヤ人の存在が浮き彫りにされます。バルナバやパウロはギリシア系ユダヤ人です。彼らが架け橋となって、ユダヤ人たちの間の福音が、ギリシア語を介して異邦人に伝えられていきました。

ところで、紀元後一世紀のユダヤ人の間には、ダニエル書は身近な存在でした。イエス様が、オリーブ山で荒らす忌まわしい者について語られた時に、ダニエルの預言について言及されましたね。そして、パウロの手紙にも、テサロニケ人に対して書いた時にダニエルの預言をよく教えていた様子がうかがえます。黙示録は、ダニエルの預言が舞台といっても過言ではありません。つまり、新約時代の人々にとって、ダニエル書は旧約聖書の時代からの地続きの預言だったのです。マラキが預言した時はペルシアの時代でしたが、その後にギリシアが出て、その次にローマが出て、そして私たちは終わりの日に生きているのだという確信があったのです。

4B　新ローマ帝国　７－８

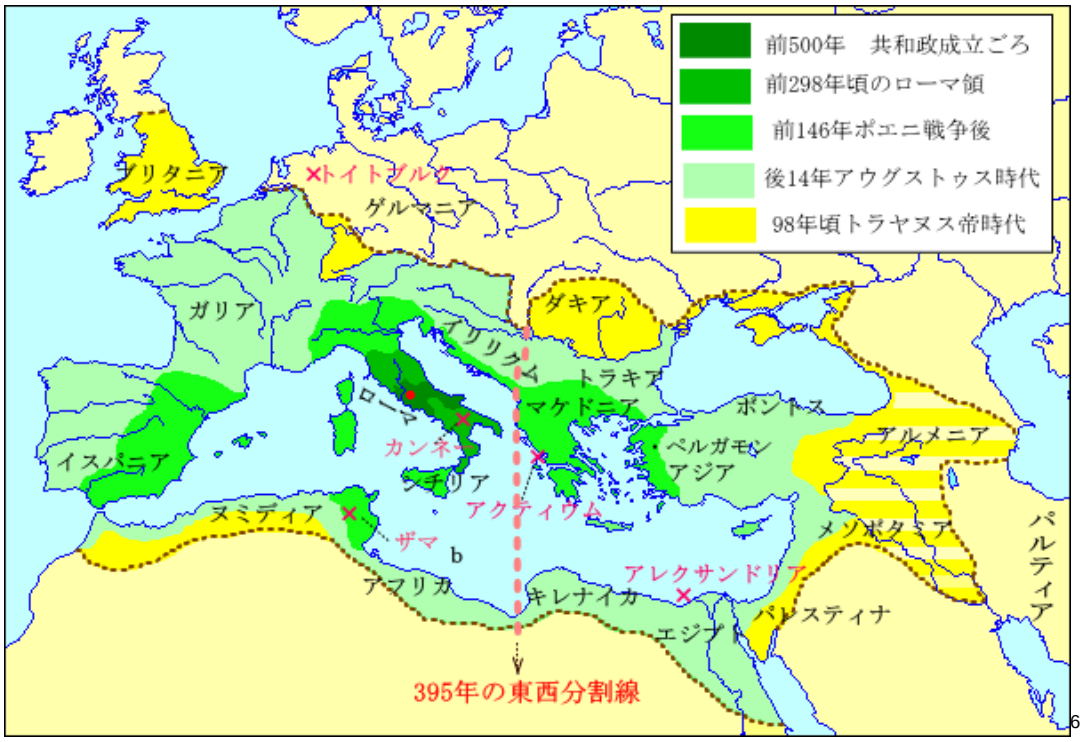
1C　十本の角　7

7 その後また夜の幻を見ていると、なんと、第四の獣が現れた。それは恐ろしくて不気味で、非常

に強かった。大きな鉄の牙を持っていて、食らってはかみ砕き、その残りを足で踏みつけていた。これは前に現れたすべての獣と異なり、十本の角を持っていた。

これまでの三つの獣は、獅子に似たもの、熊に似たもの、豹に似たものとして、自然界にある獣になぞらえることができましたが、第四の獣は別です。あまりにも恐ろしく、不気味で非常に強かったとあります。しかも、なんと大きな鉄の牙を持っています。そして、角がきわ立っていました。なんと、十本の角があります。これまでの国々を食い尽くし、さらにこれまでの獣と一段と恐ろしい、異なる姿をしていました。

これが、ローマ帝国です。紀元前 168 年に共和制ローマがギリシアを倒しました。そして、紀元前 27 年から皇帝による帝政が始まりました。そして紀元後 395 年に東西に分裂して、西ローマ帝国は 476 年に崩壊します。そして東ローマ帝国はなんと 1453 年まで続きました。これまでの帝国とは一段と違う、千年以上も続く、永遠に続くのではないかと錯覚するぐらいの長い統治であり、また地中海を完全に一周する領域を支配したのです。



[6]

この獣の描写は、これまで他の猛獣に例えていたけれども、それができない獰猛な姿をしていました。牙が鉄で出来ています。そして、「食らってはかみ砕き、その残りを足で踏みつけていた。」とあります。これは、ローマの征服をよく描写しています。紀元前 264 年に始まったポエニ戦争によって、ローマは速やかに地中海周囲にある国々を征服しました。そして、軍人ポンペイウスは紀元前 63 年にエルサレムを攻め取りました。その後、ローマはヨーロッパを北上し、英国の南部、フ

[6]https://www.y-history.net/appendix/wh0103-069.html

ランス、ベルギー、スイス、そしてドイツにまで支配を広めました。ギリシアのアレクサンドロス大王の場合は、征服しても、その被征服民を虐げることはありませんでした。もし蹂躙していたら、あれだけすばやく進出できなかったでしょう。けれどもローマは違います。征服した国々と民の文明を破壊して、粉々にし、捕虜を何千人も殺し、また奴隷として十数万人売りました。

それから頭には十本の角があります。人の像のことを思い出してください。鉄のすねがありました。その後で足の部分は、鉄と粘土の混じっており、足はもちろん十本の指があります。十本の角は、その指の数に相当します。

ローマは他の帝国と異なり、四世紀という長期に渡り拡張を続けました。その衰退も長期に渡り、先に説明したように、東西に分裂しました。人の像の鉄のすねが、右左の二つに分かれているのは東西のローマを表しているのかもしれません。そして、古代ローマが崩壊しても、欧州には西ローマの栄光は遺りつづけ、東ローマのビザンチン帝国がイスラム勢力のオスマン朝に倒れるも、ロシアに東ローマの栄光が残り続けたのです。ローマは自らを「第三のローマ」と呼びました。

そして近代に入り、その復興が見えるようになります。西欧において欧米列強の植民地主義による世界征服です。そしてロシアではソ連邦が始まり、国際共産主義が始まりました。ソ連は崩壊しましたが、ロシアは今もかつてのロシア帝国時代の野望を捨てていません。これがまさに、鉄と粘土が混じり合った状態であります。ローマの残骸が今も世界に影響を与えていることです。

しかし、その後にこの世界は少しずつまとまっていきます。足には十本の指があります。第四の獣は十本の角を持っています。角は、聖書では権力を表しています。幕屋の青銅の祭壇の四隅、また香壇の四隅に角があったことを思い出してください。角は神の権威と救いを表しています。そして古代の彫像には、王の権威を表すべく角が彫られています。[7]

そして、ここで大事なのは、ローマ時代に私たちの主キリストが現れたということです。9 章で、詳しくこのことを学びます。ダニエル書において、第四の獣の中でキリストが現れたということは、キリストが、聖書の定める終わりの時が始まったことを意味しています。人間の歴史において、イエス・キリストが来られ教会が誕生したという事実によって、

[7] https://www.metmuseum.org/ja/art/collection/search/322609

人間の支配が瓦解し始めた、と言ってもいいかもしれません。キリストが来られたことによって、ある意味で、人間の支配の終わりが始まったと言えるのです。ですから、教会は、神の国を霊的にこの地上に介入せしめる「世の光」であり「地の塩」であります。

2C 小さな角 8

しかし、次の 8 節に出てくる小さな角は、その神の国の支配に対抗する、サタンの支配、サタンの国の最後のあがきとして登場します。

8 私がその角を注意深く見ていると、なんと、その間から、もう一本の小さな角が出て来て、その角のために、初めの角のうち三本が引き抜かれた。よく見ると、この角には人間の目のような目があり、大言壮語する口があった。

異邦人のよる王国の衝突と興亡の中で、その獣のような横暴さの先に、この人物が出現します。罪によって始まった人間の国の行き着く先が、この小さな角によって支配される世界帝国です。ダニエル書において「荒らす忌まわしい者」と呼ばれるようになり、キリストの到来の前に世界を掌握し、荒廃をもたらします。その後で、キリストの到来によって殺されて、滅ぼされます。彼が「反キリスト」と呼ばれる男です。

イエス様は、オリーブ山で弟子たちに、「マタ 24:15 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら――読者はよく理解せよ――」と言われました。そして、使徒パウロはこう言いました。「Ⅱテサ 2:3-4 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。」そして、使徒ヨハネはこの男を「獣」と呼び、黙示録 13 章において獣の国の姿が描かれています。

ところでこの「小さな角」の特徴についてですが、一つ目はもちろん「小さい」ということです。初めから王のように権力を持っているのではなく、むしろ何でもない所から現われます。二つ目は、「三本の角が引き抜か」れることです。巧みに既に権力を持っている者たちを引きずりおろして、十の王国のうちの三つを倒し、自らがその座に着きます。ですから、他の七つよりも多くの力を持ち、それで他の七人の支配者が彼にすべての権威を委譲して、それで彼は世界全体の支配者となるのです。三つ目は、「人間の目」があることです。ゼカリヤ書や黙示録には、キリストに七つの目があり、その目は御霊であることを教えています（ゼカリヤ 3:9、黙示 5:6）。これは、知識があるということです。人間の目というのは、彼は、神の見方で物事を見るのではなく、人間の見方で物事を見ます。いわゆる、ヒューマニズム、人間中心主義です。

そして四つ目、「大言壮語する口」があります。話がうまいです。すべて言葉で相手を巧みにだまします。そして神に対して暴言を吐きます。「黙示 13:6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」この黙示録 13 章には、この獣に力と位を与えるのは、竜、つまり悪魔だとあります。大荒れの海のような人間の国々の興亡の先には、このように悪魔で支配する、神の支配に対抗する国ができるということです。7 章の後半で私たちは、この小さい角が何をしでかすかを見ていきます。

ここで思い出していただきたいのは、荒れ狂うガリラヤ湖で死ぬかもしれないと不安になった弟子たちが、ぐっすり眠っておられたイエス様を起こして、イエス様がその嵐を一気に鎮められます。これが、私たちの世界情勢の見方です。どんなに荒れ狂おうが、まことの平和の君であるイエス様にあっては、無に等しいです。この方は王の王、主の主、天の神の御子であられるからです。